

巨樹・巨木シリーズ33 5月号 宮城県-3

細田木材工業株式会社
顧問 細田安治

宮城県シリーズは3回目に入る。それほどにも宮城県には有名な巨樹・巨木が多く存在する。

県庁所在地の仙台市は豊臣秀吉の時代、天下人秀吉の上洛要請に応ぜず、東北の雄として名をあげ独眼竜とも称された伊達政宗の本拠地でもある。遅れて上洛した独眼竜政宗は、秀吉に拝謁中秀吉から顎を扇子で上げられ挑発されたが動ぜず、事なきを得た、という伝説があるほど豪の者らしい。

事程左様に歴史が刻まれている宮城県で、資料提供の探索者U氏はどのような有名樹を辿ったか楽しみである。

尚、今回ご紹介の巨樹はなぜか広葉樹が多い。広葉樹を切り口として調査しながら書き進めていく。

写真番号1 樹番号25 久保の大カツラ

樹齢推定800年、樹周13m、樹高33m 宮城県気仙沼市久保 宮城県指定天然記念物

*ウィキペディアおよび宮城県ホームページを参照して。

このカツラは雌雄2本の根元から何本もの幹が出て、大きな株を形成している。

カツラは、カツラ科カツラ属の落葉高木で、ハート形の葉が特徴的。秋に黄葉して茶色になった葉はカaramel風のよい香りを放つ。樹形の美しさから庭木や街路樹にされるほか、材から家具、碁盤、将棋盤が作られる。和名カツラは葉の香りに由来し、香りが出ることを意味する「香出(かづ)る」が転訛したものといわれている。別名ではトワダカツラ、コウノキともよばれる。落葉した葉の香りからオコウノキ(お香の木)などの地方名がある。

<筆者のつぶやき>

カツラとはかづるの訛りと説あり。なるほどとうなづける。このカツラは樹齢が不明なほどの古樹である証として気づいたのは、幹はそれぞれまっすぐに伸びつつも全体としてどっしりした雄大さを持つ巨木だからだ。

また嬉しいことに根元に「ヒコバエ」が緑の若葉を散らし、力士の化粧まわしを想わすような雰囲気醸し出し、このカツラの古樹を際立たせている。そして全体が何とも言えぬ気品を感じたのは筆者がこのカツラに入れ込みすぎているからだろうか。



写真番号1 久保の大カツラ

写真番号 2 樹番号28 薬師堂の姥スギ

樹齢約1200年、樹周10m、樹高34m 宮城県栗原市繁館薬師台 宮城県指定天然記念物

*立て看板と宮城県ホームページより抜粋。

薬師堂の姥スギは県内で最大、昭和30年3月25日付きで宮城県の天然記念物に指定された。枝葉は地上8.5メートルのところから繁茂し、東西26メートル、南北20メートルにわたって広大な姿を近年まで残していた。昭和44年、落雷に、平成6年には火災に逢い、一時樹勢が衰えたが、樹勢回復事業を行った結果、徐々に回復し現在のすがたとなった。この回復は驚くべきことだ。「薬師の姥杉」とよばれ市民から親しまれている。

双林寺境内の東端に「すくと立つ姿」は1200年の老樹とは見えない威容を誇っている。

双林寺は、天平宝字4年(760年)奈良時代中期に孝謙天皇の勅命で開創され、天台宗の伽藍(がらん)48坊を構える医王山興福寺といわれていた。その後、度重なる火災で一堂を残すだけになったが、天正19年(1591年)に再建されて「双林寺」と改称、宗派も曹洞宗になった。

<筆者のつぶやき>

樹齢1200年とはつまり平安時代初期からあるということ、実に驚くべきことだ。このスギは1200年、風雨に曝され、落雷に打たれ、そのうえ人災ともいべき火災を二度も受けながらも生きてた。回復手当を受けたとはいえ、人間が想像できないような時間と苦難を受けながらも生き抜いてきたのである。このスギの巨木の何物にも負けず耐え忍び今日を迎えた姿は、人間にたとえようもない底知れぬものを感じる。姥スギと銘打たれているが、正に姥と一言で表現できない強靱さを覚えたのは筆者だけだろうか??? 筆者の厳しい祖母の記憶がよみがえった。

写真番号 3 樹番号32 祇劫寺の Kouyama

樹齢600年、樹周5m、樹高30m 宮城県大崎市田尻大貫上屋敷、国指定天然記念物

*インターネット情報を参照して。

祇劫寺にある Kouyama は、東北最大級の巨樹で、本堂裏にそびえ立ち、滝のような枝ぶりと渦巻く根が特徴的な巨樹である。しかも樹勢今なお盛ん。

大貫山祇劫寺は臨済宗妙心寺派の寺で、伊達定宗公の菩



写真番号 2 薬師堂の姥スギ



写真番号 3 祇劫寺の Kouyama

提寺。このコウヤマキのほかに、本堂は有形文化財、コウヤマキの裏手にあるマルミガヤは県指定天然記念物、ウラジロガシは市の天然記念物。

<筆者のつぶやき>

このコウヤマキの主幹は真っすぐに直立しながらも地上3mほどで主幹が分かれています、しかも直立を崩していない珍しい巨木である。しかも分かれた2本の主幹から小枝が四方八方に伸びている。まるで地中に伸びた樹根のように下向きに主幹を取り巻き、全体を覆い隠すかのような珍しい樹相を見せている。しかも足元は苔むしろである。筆者の勉強不足で、このように枝が下へ向かって伸びている巨木を見たのは初めてであり、なぜこのような樹形になるのかを知りたい。

写真番号4 樹番号34 石雲寺のコウヤマキ

樹齢300年以上、樹周5m、樹高23m 宮城県大崎市松山千石大櫓 宮城県指定天然記念物

*案内板及び宮城県ホームページ、インターネットを参照して。

根元の幹回りが8.3m、地上1.5mの樹周が5.26m、コウヤマキの巨樹である。

龍門山石雲寺の本堂前庭の崖上にあり、地上7mで2本に分かれていた幹の1本が、昭和33年12月の台風により折損した。樹勢は極めて旺盛で、コウヤマキの巨樹として^{きこうじ}祇劫寺のコウヤマキとともに県内有数のものである。

<筆者のつぶやき>

・コウヤマキとは

コウヤマキが続いたのでコウヤマキについて簡単に説明する。

「高野槇」とも書き、日本固有の樹木。名前の由来は、和歌山県の高野山に多いことからとされている。

コウヤマキは、裸子植物マツ綱に分類される常緑針葉樹の1種であり、現生種としては本種のみでコウヤマキ属、コウヤマキ科を構成する。ホンマキとも呼ばれる。特殊な線状の葉が多数輪生状について、美しく、観賞用に世界各地で植栽されている。材は耐久性があり、水にも強いことから、古代から利用されている。古墳時代の棺に広く用いられていたほどである。

・千住大橋とコウヤマキ

コウヤマキといえば、筆者には「千住大橋」である。

徳川家康の関東転封に伴い荒川(現在の隅田川)に最初に架けられた橋が「千住大橋」である。家康が文禄3年(1594年)に普請奉行伊奈備前の守忠次に命じてかけさせた木造大橋だ。この橋の材料がコウヤマキである。

大橋はその後流失のたびにかけ替えられ、江戸時代を通じて維持された。コウヤマキは主として橋杭材に使用された。千住大橋は当時多くの文人、粹人、浮世絵師、画師たちが



写真番号4 石雲寺のコウヤマキ

らも名橋としてたびたび取り上げられている。

尚このコウヤマキは、京成電車の千住大橋駅の線路沿いにある交通広場「千住大橋」のシンボルツリーとして植樹されている。

• 橋と戦

戦国の世において、橋がいかに重要であったかについて、少々述べたい。

徳川家康は戦とは「軍をいかに早く動かし攻撃ができること」を戦いに勝利する要諦と心得ていた。江戸の北の守りは荒川(現在の墨田川)である。大きな川は大軍を渡すに大きな障害となり勝敗の分かれ目となる。家康は荒川に橋を架け、大軍を一挙に進めようと考えた。これが現在の千住大橋の始まりで、この千住大橋を架けるために使われた木材が「コウヤマキ」である。コウヤマキには耐久性があり、しかも水に強い木材として広く知られていたからである。

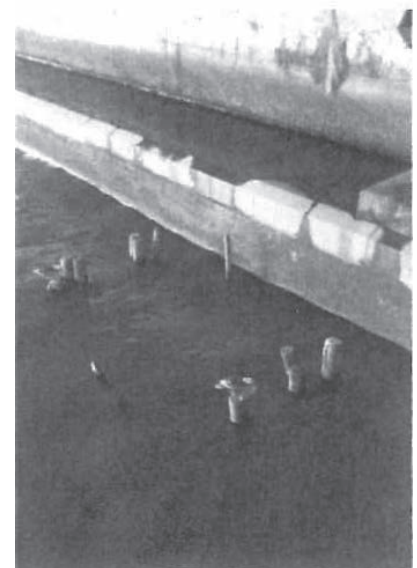
関ヶ原の戦いの直前、家康は越後の上杉勢との戦の最中で、軍勢の大半が越後に向かっていた。ところへ関ヶ原の合戦の一報が入り、家康は急遽越後へ向かっていた大軍を一挙に江戸へ戻し、関ヶ原へ向かわせ、天下分け目の戦いに臨み勝利したのである。もし、千住大橋なかりせば、大軍を動かすのに時間がかかり、関ヶ原決戦の帰趨はどうなったか？家康の慧眼により「橋を架けたことが勝利への大きなポイントであった」というのが後世の評価だが、筆者も納得である。

現在では鉄製の頑丈な橋梁となり、今なお交通の要衝として役割を担っている。大橋の下の遊歩道には、参勤交代時代の北への出発どころとしての歴史が絵図として残されている。

筆者はコウヤマキで作られた木造の千住大橋の名残を確認したく、何度か足を運んだ。干潮時に訪れたときに、栈橋と岸壁の間に川底が見え、なんとそこに数本の木杭を発見！家康が架けたコウヤマキの木の杭を確認できたのである。これには深く感動した。 つづく



写真番号5 コウヤマキの銘板と千住大橋ゆかりの木



写真番号6 420年前の橋杭材